

心理科便り Vol.25



2025年2月

そろそろ雪のピークも越えたと信じて今日この頃、みなさん冬の疲れはたまっていますか？毎日本当にお疲れ様です。
最近、ちょっと前にハマっていたハーブティーをまた飲み始めました。身体が温まるスパイスの利いたものや、ちょっと緊張を緩めるリラックス系のものなど、その時の自分に合わせてブレンドできるのもいいところ。これからくる花粉の季節にもおすすめです。
ではでは、今月の心理科便りもちょっと一息のおともに手に取っていただけると嬉しいです。

コラム「心理学豆知識」

脳外傷で人格が変わった？～Phineas Gageの症例～

人間にとって、脳はとても重要な役割を果たしているというのは紛れもない事実です。今回は脳機能に関する有名な症例をご紹介します。

1848年、米国の鉄道建築技術者だった Phineas Gage は、作業現場の爆発事故によって鉄の棒が頭部を貫通するという致命的な怪我をしました。奇跡的に命は取り留めましたが、事故によって左前頭葉の大部分を損傷しました。

その後、身体的には大きな後遺症なく回復したのですが、彼の場合は他の面で後遺症が現れました。受傷前は節度のある生活を営み、いつも活力のある人だったのが一転、受傷後は気が変わりやすくなり、手に負えなくなるほど頑固になり、その振る舞いに大きな変化が見られたと言われています。その変貌ぶりは、彼の知人が「彼はもはや Gage ではない」と言ったほどであったといいます。

この症例が示唆したのは、脳の前頭葉損傷による影響です。お気づきの通り、受傷後の Gage の様子は〈理性〉や〈判断力〉〈情動〉といった点において大きく変化が見られます。つまり、前頭葉というのはこうした能力を司っているのではないか？という疑問を初めて投げかけた症例ともいえるかもしれません。

…しかし、鉄の棒が脳を貫通…それこそ、脳幹など生命維持に直結する部位に触れずに貫通したということなのでしょうけど、ぞっとしてしまう事故ですね。



参考：山岸洋・村井俊哉 症例 Phineas Gage 認知神経科学 Vol.23 No3,4 2022

心理科の本棚



『私の脳で起こったこと レビー小体型認知症からの復活』

樋口直美（著） ブックマン社

何かの病気や障害について学ぶときには、専門書だけでなく、可能な限り「当事者の書いた本も読んでみる」ことを意識するようにしています。

誰にとっても「体験を本にする」のって決して簡単ではないですね。なので、病気を経験した（あるいはその最中の）当事者が書かれた本というのは本当に、貴重な記録であり、メッセージだと思います。

10年ほど前に初めてレビー小体型認知症の方を担当したとき、偶然にも同じタイミングで発売されたのがこの本でした。幻視のこと、診察時のこと…この本で紹介されている著者の日記からは、率直に言えば生々しく切実な苦しみと、それを経ての覚悟や願いが感じられます。

（大友）

心理科便りでは、コラムで取り上げてほしいテーマを募集しています。これについて知りたい!と思っていることがあれば、ぜひお知らせください。職員の皆さんのメンタルヘルス相談も随時受け付けています。

ご予約・お問い合わせはこちらへお寄せください。➡ mail: fujiken-sinri@fujisiro-hp.info 内線:3400



↑メールはこちら